■コラム（3 回シリーズ）　「ChatGPT の衝撃－大学と英語教育はどう変わるか」吉中昌國

【第 2 回　教育現場に求められる対応】

前回のコラムでは、ChatGPT を含む生成ＡＩは高度な確率でもっともらしい言葉を意味も分からずに繰り返している「確率学的オウム」であるという視点を紹介した。いや、そうではなく、ＡＩは自ら考え始めていて自我も芽生えつつある・・・と言うＡＩ専門家も少数ながらいる。その理由のひとつになっているのが、emergent abilities（創発的能力）という現象だ。言語モデルが大規模になると、それまでできなかったことが突然できるようになることを言う。簡単な足し算と引き算をする能力、単語の意味を文脈で理解する能力、指示を理解する能力、質問の意図に沿って答える能力などがあると報告されている（“Emergent Abilities of Large Language Models”, Jason Wei, et al., August 2022）。 開発者が頼みもしなかったことを勝手にできるようになるのは確かに不思議であり、新たな知性の誕生を想像したくなる気持ちはわかる。しかしながら、スタンフォード大学の Rylan Schaeffer 他による最近の論文 （”Are Emergent Abilities of Large Language Models a Mirage?”, 22 May 2023）は、創発的能力は計測方法の不十分さから生まれた錯覚の可能性が高いと述べていて説得力がある。自ら思考するＡＩとの遭遇はまだないという想定のもとに、ChatGPT（そしてその後に続く、さらに進化した生成ＡＩ）が大学の教育現場に与える課題に話を進めよう。すでに多くの人々が多様な視点から語り、実践的な試みも行われている。このコラムでは短期、中期、長期の３つの視点で整理してみたい。

１．短期的課題：公正な評価をする

ChatGPT の使用を学生に禁じることは現実的ではないし学生のためにもならない。今の学生たちが卒業して入社する企業では仕事の効率化のために当然のように使用していることだろう。パナソニックグループが ChatGPT をベースにした社内 AI を全社員が使えるようにしたというニュースもあった。これまでは助言をくれたり課題を助けてくれたりする人が身近にいなかった学生も ChatGPT の恩恵を受けられるので、教育サポート面での格差が減少するというプラス面もある。が、ChatGPT で課題を片付ける学生と真面目に自分の力だけで頑張る学生を同様に評価する不公平さはなんとしても避けなければならない。

早急に構築する必要があるのは、ChatGPT の存在に左右されない評価方法だ。教室内で完結する試験や作業、発表だけで評価するという方向に進むことはできる。が、学生がじっくりと資料を読んで自分の考えをまとめる力を評価対象にできないことや、そんな力を伸ばす機会を与えられないことを、残念に思う教員も多いだろう。一般的なリソースがないマイナーなトピックを選んだり、個人的な経験を組み込むことを求めたり、ChatGPT が対応していない２０２２年以降の出来事にフォーカスしたりすることもできるが、課題の幅が狭くなってしまうという弱点がある。また、生成ＡＩのベースとなる情報がつい最近のものまで含むようになる日は遠からず来るだろう。生成 AI 特有の「指紋」を検知してくれるＡＩの登場を期待したくなるが、いつになるのか、どれだけ正確な判定ができるのか、そんな判定を特定の企業に任せてしまってもいいのか、懸念は尽きない。

おそらく最も実効性のある対策は、ライティング課題に生成 AI の使用を予め組み込むことだろう。ChatGPT で生成されたデータの部分と自分自身の意見の部分を明確に分けて提出してもらい、後者を綿密に評価するのはどうだろう？　ChatGPT への問いかけを含めた履歴や ChatGPT で作成したアウトラインを添えることを求めたりすることも試行されているようだ。長年に渡って使われてきた盗用・剽窃（plagiarism）の定義を時代に合ったものに改訂することも必要になるかも知れない。生成 AI のない時代に学生であった人々は、これまでの常識や経験から離れて考え試行錯誤することを求められていると（自戒を込めて）思う。具体的な方法や成果についての多くの報告が速やかに共有されていくことを期待したい。

２．中期的課題：生成ＡＩを適切に使うスキルを与える

公正な評価をすることと平行して、在学中にも卒業後にも生成 AI を適切に使っていけるような知識とスキルを学生に与えることも重要だ。その最初のステップは、生成 AI が内包する問題点を学生にしっかり理解してもらうことだろう。

このパラグラフを書き始める直前に、ChatGPT に「初めて英語を学んだ日本人は誰？」と尋ねてみたら、「初めて英語を学んだとされる日本人は、福沢諭吉です」という答えが返ってきた。回答を再度求めても同様の内容で、福沢の経歴をまとめた文章が続いた。福沢が６歳の頃にすでにアメリカに渡っていたジョン万次郎も、江戸時代初期に日本に住んだウィリアム・アダムスの妻お雪も出てこない。「日本で作られた最初の英語辞書は？」と尋ねると、「福沢諭吉が編纂した『英学初歩』です」と答えた。が、Google で調べると本木庄左衛門が１８１４年に完成させた「諳厄利亜語林大成（あんげりあ・ごりんたいせい）」が出てくる。ついでにこの「諳厄利亜語林大成」について ChatGPT に尋ねると、半端ない数の事実誤認が含まれた回答になったので下に貼り付ける。（念のために「諳厄利亜（あんげりあ）」を調べてみたが、ラテン語でイギリスを意味する Anglia のことだった。）

> 「諳厄利亜語林大成」は、1835 年に吉田松陰が 19 歳の時に編纂を開始し、1843 年に完成した中国語辞典です。当時の日本では、中国語が国際的な言語として重要視されており、学問や外交において必要な知識とされていました。吉田松陰は、中国語の辞書を作成することで、中国の古典や文化に触れ、日本の学問や教育の発展に寄与しようとしました。
> 「諳厄利亜語林大成」は、中国語の単語や成句をアルファベット順に収録しており、それぞれの語に対して日本語訳や解説が付されています。辞典の名前「諳厄利亜」は、当時の日本で中国を指す呼称であり、「語林大成」は辞書の総称です。

これは AI 研究者が hallucination （幻覚）と名付けた現象の例だ。言語モデルに基づいた生成ＡＩが、データからは正当化できないことを自信満々に述べる現象である。「確率学的オウム」である生成ＡＩは事実とは本質的に縁がないので特に驚くべきことではない。「幻覚」と呼ぶと一時的な錯乱であって普段は「正気」であるような印象を与えるので、誤解を生む用語だと私は思う。ChatGPT には「幻覚」も「正気」もない。この現象は、一見滑らかな人間の言葉の背後にある「オウム語」が姿を現したに過ぎない。

ChatGPT のこのような属性を学生に理解してもらうためには、実際に ChatGPT を使ってみるアクティビティが有効だろう。学生自身が間違いを発見する体験を通して、ChatGPT が自信ありげに繰り出す情報を批判的に見る力を育て、他のリソースを駆使して事実誤認を見抜くスキルを伸ばすことができる。

次に必要なステップは、ChatGPT を有効活用する方法を明示し、実際にその目的で使ってもらうことだろう。自分の言葉で書き始める前に一般的な知識を俯瞰すること、行き詰まったときに問いかけと回答を通して発想のヒントを得ること、ビジネスの定型的な文章を作成すること、プログラミングを補助することなどが活用法として現時点で提案されている。

ベースとなった言語情報にもともとあった偏見に気づく力も大切だと思う。生成ＡＩの回答に偏見、差別、ヘイトが含まれないようにする努力を開発者は続けているようだが、２０２２年に発表された論文でも LGBTQIA に対する有害なアウトプットが残っていることが指摘されている （Debora Nozza, et al.）。そもそも英語情報をベースに開発されたものであって、現時点では英語文化的なフィルターがかかっていることも学生には知っておいて欲しいと思う。

３．長期的課題：ＡＩ時代を生き抜く力を与える

ＡＩを「Copilot（副操縦士）」に例えるのは目新しいことではないが、マイクロソフト社が先月末に Windows 11 用の製品名として発表したことで、多くの人の目に触れるようになったかと思う。ＡＩはあくまでアシスタントであって人間を置き換えるものではない、安心してください、頼りがいがあって、とてもいいやつですよ、というメッセージがこめられている。そんなマーケティングに文句を言うつもりはないが、このような表現を見ると考えてしまうのは、「Pilot（主操縦士）」のほうに求められる能力のことである。

この副操縦士は人間のように話すが実はオウムなので何も考えていない。生成ＡＩがしてくれることは一見パワフルで効率的な「リサーチ」のように見えるが、実際には単なる「サーチ」に過ぎない。サーチで得た情報を俯瞰し、疑問を持ち、考え、複数の角度からさらに調べ、自分の構成でまとめていく力がリサーチには必要だ。このような力はこれまでの大学教育でも重要視されてきたものだが、ＡＩが副操縦士となる時代にはさらに重要になると思う。ＡＩに依存してしまうと、飛行機を操縦できない主操縦士になってしまう。

自分で考える力を学生が身につけるためには、「タイパ」という言葉に象徴される効率至上主義とは逆の方向に進むことも必要だろう。立ち止まって、ゆっくり考えてみる。決めつけないで、判断保留する。結果をすぐに求めず、世界を広く見渡して、想像力を羽ばたかせる。そんなことをする機会と喜びを学生に与えることも、ＡＩ時代の大学に期待される役割ではないか。

ＡＩにはできないが人間にできることのひとつは、本当のコミュニケーションだと思う。前回のコラムで紹介した ChatGPT の回答ににあった「コミュニケーション」とはもちろん違う。単なる双方向の情報交換でもない。人間同志のコミュニケーションは対話である。対話では自分の価値観を自覚し、相手の価値

観を尊重し、すり合わせを行う。理解と共感を通して、自分も相手も少しずつ変わっていく。ＡＩ時代にこそ重要になるのは、そんな対話力を伸ばす教育だろう。

次回の最終コラムでは英語教育への影響について考えたい。

吉中昌國
カリフォルニア大学バークレー校で社会学修士号取得。
異文化や語学研修における豊富な知識と体験を基に、多くの大学、高専で「異文化研修」、「アカデミックライティング研修」「ＦＤ研修（英語で効果的に教えるために）」を担当。
インタラクティブで丁寧な指導に定評があり、いずれの大学、高専でも高い評価を得ている。

■教職員向け研修のご案内
https://www.alc-education.co.jp/academic/training/class.html